

江戸の生活と ” 時 ”

時の流れに身をまかせ

77期 山本英司

<ダイジェスト>

皆さん、”時計”に追い立てられて毎日を過ごしていませんか？
時間の概念が今とはちょっと違って暮らしていた ”江戸” の
人々の話をさせていただきます。

◆ 現在の時間の定義と伝播方法は、

時間の定義

セシウム原子時計(1967年～)

「秒は、セシウム133の原子の基底状態の2つの超微細準位間の遷移に対応する放射の91億9263万1770周期の継続時間である」

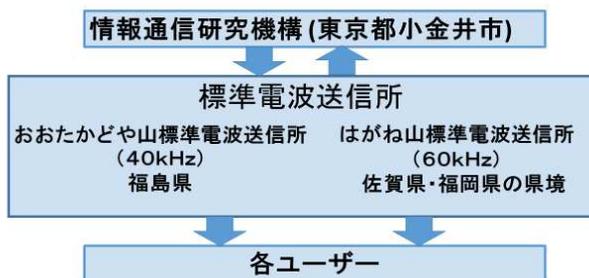
10兆分の1秒の精度

標準電波で伝播

原点は1958年1月1日0時0分0秒の平均太陽時

地球自転との不整はうるう秒で調整

標準電波



◆ 江戸時代では、

長谷川平蔵が三ノ輪へあらわれたのは、**四ツ半ごろ**であつたらう。

三ノ輪は、上野山下から坂本、金杉を経て千住へぬける奥州・陸羽両街道の筋街道に面してい、往還は近年に至って、大いに賑わいはじめている。……

(第11巻 土蜘蛛の金五郎より)

“ 四ツ半ごろ ”

江戸の時刻

昼は太陽、夜は月の運行を目安 とする。

夜明け ⇒ 明け六ツ

日暮れ ⇒ 暮れ六ツ

”不定時法“

夜明け、日暮れとは、

日の出、日の入り

⇒ 太陽の上端が地(水)平線と重なった瞬間とする

夜明け、日暮れ時

⇒ ものが目に見えるかどうか

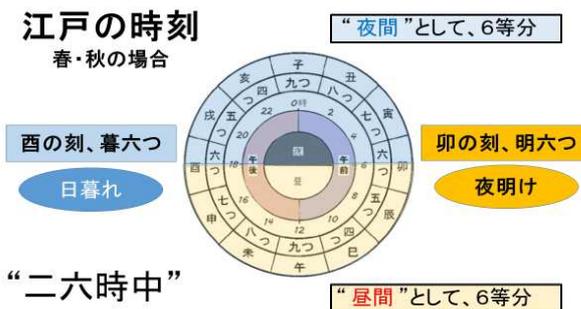
「明け六ツ」は「大きな星がばらばらと見える」

「暮れ六ツ」は「手の筋を見て細いものは見えないが大きな筋は見える」程の明るさの時である。

寛政年間以降

江戸の時刻

春・秋の場合



“二六時中”

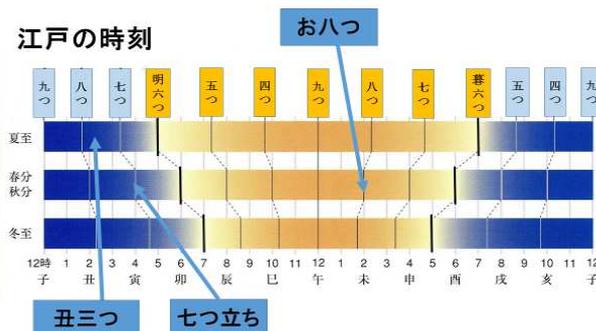
“ 草木も眠る丑三つ時...”

「丑(うし)」の一刻(いっとき) = 夜中の1時~3時

4等分した3番目のところだから、

午前2時~2時半までの約30分間

江戸の時刻



◆ 時報の方法

時の鐘

芭蕉
”花の雲 鐘は
上野か浅草か”

幕府公認



時の鐘

日本橋石町



時の鐘

浅草



時の鐘

日本橋石町では時刻になると、
捨て鐘を3回(約1分30秒間隔)撞いて、その時刻の数だけ時報として撞きました。それを聞いて幕府公認の時の鐘(上野、浅草など)が同じ数だけ撞いて各町々に時刻を知らせました。

鐘役銭 料金の徴収(月四文)

鐘撞堂には水時計(漏刻)、定香盤が備えてあり、堂守の監督のもとに、堂によって四~八人の鐘撞き男が昼夜交代で勤務しました。

“時の鐘”

延喜式に基づき、

子(0時)	九つ	午(0時)	九つ
丑(2時)	八つ	未(2時)	八つ
寅(4時)	七つ	申(4時)	七つ
卯(6時)	六つ	酉(6時)	六つ
辰(8時)	五つ	戌(8時)	五つ
巳(10時)	四つ	亥(10時)	四つ

時計の変遷(日本)

縄文時代

⇒ 巨大な岩の隙間に差し込む光を使って
日時、季節を知る

天智天皇(671年)

⇒ 漏刻(水時計)、
日本の時刻制度が正史に

時計の変遷(日本)

中世以降~

⇒ 日時計、火時計(ろうそく、ランプ、香、線香)、砂時計など

機械時計 ⇒ 16世紀中ごろ 鉄砲伝来と同時に

和時計 ⇒ 17世紀後半ごろ

天智天皇の水時計を再現したもの。近江神社にある。



ろうそく時計



幕末、田中久重作の万年時計こと万年自鳴鐘は和洋折衷時計の究極

◆ 暦について

太陽暦

太陽の運行でを数える

- ・エジプト暦
- ・ローマ暦(ユリウス暦)BC46年 1年=365. 25日
- ・グレゴリオ暦(1582年) 1年=365. 2425日+閏日

日本も採用(明治6年 1873年)

真値 1年=365. 2422日

日本の暦の歴史 = 太陰太陽暦

- ・漢の武帝(BC104) 三統暦
3世紀初 魏志倭人伝に「日本は“但々春耕・秋収”」
- ・元嘉暦(443年 南朝の宋) / 儀鳳暦(665年 唐)
- ・宣明暦(822年 唐) ⇒ 江戸時代まで使用
- ・授時暦(1281年 元)
- ・貞享改暦 大和暦(最初の日本製暦) ⇒ **貞享暦**
- ・寛政改暦 ⇒ 天保改暦(旧暦)

渋川春海

太陰暦

・月の満ち欠けで日数を数える

; 朔(新月) ⇒ 上弦 ⇒ 満月 ⇒ 下弦 ⇒ 新月……

一朔望月 = 29. 530589日

大の月(30)日と小の月(29日)を交互に並べて、
12朔望月を“太陰暦”の一年 ⇒ 約354日
太陽暦の一年(365. 2422日)より約11日短い

年初(1月1日)はどのように決まったか

- ・エジプトでは、シリウス(おおいぬ座α星)が太陽と同時に出現する日(洪水⇒播種⇒収穫)
- ・古代ローマ歴では、3月を年初。(春分)
- ・中国では、「雨水」を含む月の第一日(朔)を年初。
北斗七星の尾が、雨水月の夕刻には、垂直になって真北(子の方向)を指す; 夏時代
漢の武帝(BC104); “立春正月思想”
⇒ 日本に伝播

和暦(元号)

元号が政治的支配の正統性を象徴するという観念
日本 ⇒ “大化” …→ “大宝” 以降継続的

江戸時代に入ると幕府によって出された禁中並公家諸法度第8条により「漢朝年号の内、吉例を以て相定むべし。但し重ねて習礼相熟むにおいては、本朝先規の作法たるべき事(中国の元号の中から良いものを選べ)。

明治以後は、新天皇の即位時に改元する一世一元の制に。

◆ 明治になって、これまでの太陰・太陽暦を世界共通の太陽暦に改暦しました。

明治の改暦

明治5年11月9日に布告

明治5年12月3日 旧暦(太陰太陽暦 天保暦)

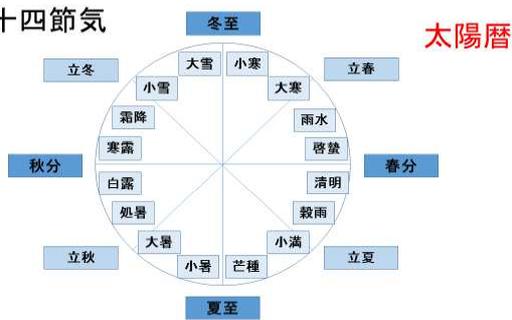


明治6年 1月1日 新暦(太陽暦・グレゴリオ暦)

急いだ理由 ; 日本歴と西洋暦との間で起こる暦のズレは深刻な問題だったので改暦は必然だった。しかし、別の理由も……。維新直後で政府は財政危機にあったといえます。翌年の明治6年は旧暦では閏月があり1年が13ヶ月になり、官吏の給料を13回支払わなければならなかった。この改暦で明治5年12月分と明治6年閏月分で計2ヶ月分の給料を節約出来た。

この急な改暦で生じた混乱は、改暦時の暦業者、年中行事や慣習“月遅れ”による季節感とのズレ

二十四節気



七十二候

二十四節気をさらに約5日ずつの3つに分けた。

江戸時代に入って渋川春海ら暦学者によって日本の気候風土に合うように改訂され、「本朝七十二候」が作成された。

二十四節気	候	略本暦 (日本)		宣明暦 (中国)	
		名称	意味	名称	意味
立春	初候	東風解凍	東風が厚い氷を解かし始める	東風解凍	東風が厚い氷を解かし始める
	次候	黄鶯睨院	鶯が山里で鳴き始める	蟄虫始振	冬籠りの虫が動き始める
	末候	魚上氷	割れた水の間から魚が飛び出る	魚上氷	割れた水の間から魚が飛び

◆ 江戸の生活

江戸の生活



町人の年中行事

- 1月 正月、人日(七種)
- 2月 初午
- 3月 上巳(雑祭り⇒享保雑、十軒店の雑市)、花見
- 5月 端午(菖蒲の節句)、単衣に衣替え、川開き
- 6月 嘉祥
- 7月 七夕、二十六夜待
- 8月 月見(十五夜)
- 9月 重陽、綿入れに衣替え、月見(十三夜)
- 10月 玄緒、恵比寿講(べつたら市)
- 11月 酉の市
- 12月 暮の市

幕府の年中行事

- 1月 禊祓の儀、年頭之御祝儀、御幕初、御願初、御成始、寺社参賀、七種参賀、伊勢・日光代参、平服着用、御具足開、御用始、京都御使、
- 2月 講書始、御内書、積奠、勅使参向
- 3月 上巳(雑祭り)、紅毛人参上謁見
- 4月 更衣、参勤御暇御礼、紅葉山参詣(元和2年4月17日)
- 5月 端午
- 6月 氷室のお祝い、山王祭礼、嘉祥
- 7月 七夕、漁獵御成
- 8月 八朔
- 9月 更衣、重陽、月見の宴
- 10月 玄猪
- 11月 碁将棋手合、隠居・家督仰付、寒入の日
- 12月 煤納、一同官位、歳暮、節分

五節句

幕府の公式行事で、将軍以下全ての武士、町人が祝った。

- 1月7日 人日の節句
- 3月3日 上巳の節句
- 5月5日 端午の節句
- 7月7日 七夕
- 9月9日 重陽



町人の年中行事

花見

寛永寺(上野)
御殿山
飛鳥山
隅田川兩岸
小金井

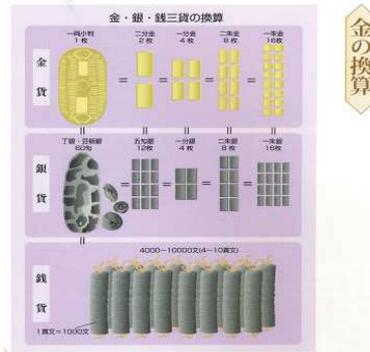
月見

二十六夜待(7月26日)
十五夜(8月15日)
十三夜(9月13日)

両国の川開き

5月28日~8月28日
花火(享保~)⇒玉屋、鍵屋

江戸の知識 ① (江戸の範囲)



江戸時代後半の物価 ①



江戸時代後半の物価 ②

浮世絵	32文	西瓜	40文	大福餅	4文
見世物	24文	次庵大根	15文	蒸羊羹	60~70文
歌舞伎(観劇)	3,500文	鮎(握り寿司)1個	8文	串団子	4文
風呂屋	8文	鱈(1尾)	200文	ところてん	60~70文
蓑簾(日本橋~吉原)	200文	鯉飯	100~200文	甘酒(1樽)	8文
形屋(書状1通)	30文	豆腐(14丁)	14~15文	冷や水(1瓶)	4文
旅館(中級)	200文	納豆	4文	菜種油(1合)	40文
木綿(1反)	600文	糞(1升)	10文	居酒屋(酒1合)	20~32文
下駄(並)	50文	このしろ	2~3文	煙草(14g)	8文
番傘	200文	ゆで卵	16~20文	百日撫子	200文
蛇の目傘	500~800文	天麩羅蕎麦	32文	蕎麦き粉1袋(1か月分)	6~8文

◆ 現代の日本のあわただしさ、騒々しさを思うと、以下の文章は我々にふと立ち止まって考え直してみてもどうかと示唆しているように思えます。江戸末期、あの日米修好通商条約を締結した タウンゼント・ハリスの通訳として来日し、日本に滞在したヘンリー・ヒュースケンの日記の一部です。

終わりに当たって、

HENRY HEUSKENの日記(1857年12月7日)

渡辺恭二著“逝きし世の面影”より、

いまや私がいとおしさを覚えて始めている国よ。
この進歩は本当にお前のための文明なのか。
この国の人々の質樸な習俗と共にその飾り気のなさを私は賛美する。
この国土の豊かさを見、いたるところに満ちている子供たちの嬉しい笑い声を聞き、そしてどこにも悲惨ものを見出すことができなかった私は、おお、神よ、この幸福な情景がいまや終わりを迎えようとしており、西洋の人々が彼らの重大な悪徳を持ち込もうとしているように思われてならない。